

〔鈴木みどり先生を偲んで〕

鈴木みどりさんの思い出

和光大学人間関係学部教授 井上輝子

鈴木みどりさんとはじめて知り合ったのは、いつのことだったか、はっきり覚えてはいないが、みどりさんが、1977年にFCT子どものテレビの会をつくられた直後のことであったような気がする。4半世紀以上の間、なにかとおつき合いをさせていただいた。

一緒に仕事をした最初の記憶は、東京都生活文化局の委託を受けて実施した「マスメディア文化と女性に関する調査研究」である。1985年に、神田道子さんを代表に、鈴木みどりさん、村松泰子さんと井上が集まり、各自が1名ずつ若い研究者を伴って研究会を組織し、メディア接触と女性の意識に関する調査研究を行った。約一年半にわたる共同研究で、調査の企画から結果分析までを、全員で検討しながら進める、楽しく、充実した会だった。頻繁に集まるうちに、お互いの学問観やメディア観はもちろん、趣味や私生活まで、わかってきて、交流が深まった。みどりさんが女子学院の出身であり、自由闊達な人生態度は、ご家庭のみならず、学校時代に培われたものであることがわかり、納得したことを思い出す。

この頃、私は女性雑誌研究会を組織し、女性雑誌の日本・メキシコ・アメリカ比較研究に従事していた。調査結果をまとめるのに時間がかかったが、ようやく成果をまとめ、出版の見通しがついた1988年末に、外部の方々をお招きし、私たちの研究の意義や限界を話し合っていたく座談会を行った。この座談会に、みどりさんは快く参加してくださり、女性雑誌とテレビが、消費文化、商業主義化の進行という点で、共通の問題を抱えていることなどについて、発言して下さった。この座談会は、翌1989年に上梓された『女性雑誌を解説する』（垣内出版）に収録させていただいた。

サバティカルで私が大学を離れている間、みどりさんに、和光大学で、マスコミ論の授業を担当していただいたこともあり、和光大学の学生の中には、FCTに参加する者も少なくなかった。みどりさんは、以前からメディア・リテシー教育に関心を持っておいでだったが、1992年に監訳出版された『メディア・リテラシー』（カナダ・オンタリオ州教育省編）は、日本のメディア・リテラシー運動に決定的な影響を与えたと思われる。私もこの訳書をはじめ、みどりさんたちがFCTで毎年のように出される調査報告書などを、和光のメディア関連の授業で活用させていただいた。

1990年代に入る頃から、マスコミ学会の中で、女性とメディアに関心を持つ者たちが、一種のコーカスをつくる動きがあり、みどりさんも私もこの流れの中にいた。この集まりは、1995年の北京世界女性会議を機に、GCN（ジェンダー・コミュニケーション・ネットワーク）として、研究者のみならず、メディアの現場で働く人たちを含むネットワークとして、組織化されていった。北京で

開催された第4回世界女性会議のNGOフォーラムで、GCNは、「商業化するフェミニズム」と題するワークショップを主催。私はティーンズ向け少女雑誌についての分析を発表したが、みどりさんは全体の司会ならびに、「日本のメディアに向けた提言」のとりまとめをされた。

北京から帰った翌96年3月に、東大でイギリスのステュワート・ホールらを招いた国際シンポジウム「カルチュラル・スタディーズとの対話」が開かれた。メディア・ジェンダー・セクシュアリティ分科会のコーディネーター役を引き受けた私は、ここで、みどりさんにコメンテーター役をお願いした。みどりさんが、この分科会への参加者の圧倒的多数が女性であることに言及し、「ゲッター化」の危険性を指摘する発言をされ、論議を呼んだことを記憶している。

立命館大学に就職され、葉山と京都を往復される忙しい生活の中、みどりさんは、メディア・リテラシーの普及に尽力された。国際会議に出かけていくのは言うまでもなく、FCTを基盤に、アジア各国からメディア研究者を招いて国際セミナーを開催し、また関連書籍の出版にも積極的であった。私などにも、お誘いや、協力依頼の声がしばしばかけられた。2001年に客員研究員としてロンドンに滞在している間に、みどりさん編集になる『メディア・リテラシーの現在と未来』の校正をしたことなどを思い出すものの、私のみどりさんからの声かけにお応えできたのは、半分に達したであろうか。

みどりさんは、英語が堪能で、とても行動力のある国際人であった。このことは、みどりさんと付き合ったことのある人ならば、誰もが認めるところだろう。これに加えて私は、みどりさんの行動力の背景に、自分を律する「神の声」(?)を聞いておられたのではないかと想像する。時折、彼女の口から耳にした「自分に課す」という言葉が、私には、とても印象に残っている。池袋の教会で行われた前夜式の折に、みどりさんが若い頃に洗礼を受けられていた事実を知り、ますますこの思いは強くなった。

「神の声」(?)に導かれて、ひた走りに人生を走り続けられたみどりさん、安らかにお休みください。

指導者としての鈴木みどり先生に寄せて

世界思想社編集部 大道玲子

鈴木みどり先生には数多くのご著書・翻訳書がありますが、世界思想社では、1992年刊行の『女性とメディア』に寄稿いただいて以降、『メディア学の現在』(1994)、『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』(1997)、『現代広告学を学ぶ人のために』(1998)、『メディア・リテラシーの現在と未来』(2001)、『メディア社会の歩き方』(2004)…と多くの書物で、執筆者として、また編者としてお世話になって参りました。小社のこの分野では、たいへん存在感のある執筆者のお一人といえます。

私自身にとりまして、初めて編集者として一冊の本全体を担当したのが『女性とメディア』で

あり、以後、縁あって小社における鈴木先生の編書を順次担当するなか、出版というメディアを意識する上でも、また一つ一つの書物を作り上げてゆく仕事上の訓練の問題としても、編集者として鍛えていただいたように思います。

立命館大学に赴任されて以降はとくに、地元・京都の版元ということで意識していただき、大学院生の皆さんも巻き込んで進めてきた何点かの翻訳書の企画のほか、お目にかかるたびに、様々な企画・アイデアをお伺いしました。メディア・リテラシーというまだまだ新しい分野の発展・定着のため、また何よりも、指導していらっしゃる学生・院生の皆さんの研究者としての進路ということ強く意識され走り続けていらっしやるのが、そばにいただけでもひしひしと感じられることでした。

3点並行して進めてきた翻訳作業のなかなか思うように進まぬうちに病を得られ、第1点めとなる『メディア・リテラシー教育』の脱稿・校正作業のおおよそできたところで、鈴木先生の訃報に接することになってしまいました。ご家族からは、先生が生前、本書について「メディア・リテラシー領域で標準になる本」と話されていたと伺いました。刊行の間に合わなかったことが本当に悔やまれます。

このほかにも、編者・監修者としてお名前を冠する形ではないものの、鈴木先生とのお話の中で立ち上がった企画がいまも進行中です。先生の指導なさった若手研究者の皆さんや、鈴木先生が立ち上げ、長く責任者を務めていらしたFCTの皆さんと共に志を継ぎ、すすめて行きたいと思えます。

ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

さようなら、そして本当にありがとうございました。

媒体知育事始め

リベルタ出版代表 でん 田 ご 悟 つね 恒 お 雄

あれは、ソ連が崩壊した1991年の秋だったのだろうか、FCT（当時は「市民のテレビの会」）を主宰していた鈴木みどりさんが、北米での国際会議で入手された1冊の大判の本を、私の目の前に差し出した。

「これ、日本で出版できるかしら？」

「Media Literacy？」

それまで聞いたこともない言葉だった。ともあれ、しばらく原書をお預かりして検討させていただくことにした。

帰りの電車の中で読みはじめたところ、予想もしていなかったなかなかの内容に、ぐいぐい引き込まれていった。そしてその翌日すぐに、みどりさんに電話した。

「ぜひ、やらせてください」

さっそく FCT メンバーの中から翻訳者集団がつくられた。実際に翻訳に携わるのは、鈴木さんを含め 4 人だったが、さらにそれと同じ人数の「翻訳協力者」が選ばれた。しかも、そのほとんどの方は、英語がわからないと言う。

実はここが、市民運動オーガナイザーとしての鈴木さんの素晴らしいところだと、あとになってわかった。喫茶店などで開かれた翻訳検討会には「協力者」や私を含め、毎回ほとんど 9 人全員が顔をそろえた。協力者たちは、英語の原文にとらわれず、まったくの日本語として翻訳テキストのチェックにあたってくださった。「編集者は最初の読者」とよく言われるが、今回はそれが、本を出す前から 4 人も 5 人もいたというわけだから、考えてみれば、これはとてもぜいたくな作業だった。おかげで、かなりわかりやすく、大胆な翻訳ができたと思う。

翻訳が全文あがったところで、さあて、書名をどうするか？—。

「メディア教育」という案も出たが、それではこの本の新しさが出てこない。当時、「メディア教育」といえば、教育現場にメディアを持ち込む視聴覚教育か、せいぜいのところ「学校に新聞」の NIE がイメージされるくらいだった。つまりは、「ツールとしてのメディア」にすぎなかった。それでは、メディアそのものを俎上にのせ、それを批判的に読み解くというメディア・リテラシーの基本的なコンセプトは表現できない。「新しい酒は新しい革袋に」だ。まったく新しい概念を普及しようというのだから、呼び名もまったく新しいものにすべきだ。ならば、原文むき出しの「メディア・リテラシー」で行こう、ということになった。

本が出る直前、神保町の零細出版仲間との雑談—。

—（ゲラを開帳して）10年早いと思うんだが、こんど、こんな本を出すんだけど、どうだろう？

—あっ、こりゃ売れないね。だいたい何のことも意味がわからないじゃないか。

—でも、「何だろう？」効果ってのもあるんじゃない？

本が発売になり、果たして悪友らの言うとおりにになった。

たまに入る書店からの電話注文も、

—メディア、リテラ… う～ん、何だい？ こりゃ…

—メディア・リテラシーじゃないですか？

—う～ん、それだ、それ。それ 1 冊。

といった具合で、なかなか捌けない。梃子でも動かない在庫の山が、倉庫の奥にうずたかく積まれた。

「やっぱりだめか〜」と観念して 3 年目、霞が関方面から何やらぼちぼち動きが出てきた。どうやら文部省が目をつけたよう。「第 4 の権力」対策ということなのか、いささか動機は不純なのだろうが、審議会が取り上げたのだ。話はとんとん進み、晴れて高校の公民教科書に「メディア・リテラシー」が登場した。

となると、「柳の下にドジョウは3匹いる」といわれる出版界、またたく間に同じタイトルの本がいくつか出そろった。

そして、さらに4年ほどたった木曜日の朝。ふだんは壊れているかと思うほど静かなリベルタの電話がひっきりなしに鳴り始めた。前の晩のTBS「ニュース23」で、この本が紹介されたのだという。カナダのメディア・リテラシー事情のルポのあと、女性キャスターさんが、「実は、日本でも、だいぶ前にこんな本が出ていました」と、本をちらちらさせたそう。

おかげで翌木金2日間は電話が鳴りっぱなし。テレビの力をいやというほど痛感させられた。しかし、土日ははさんで月曜日、電話はピタリと止まっていた。これも、電波メディアのテレビゆえということか。

面白かったのはその後である。ふたたびいつもの深い眠りに就くかに思われた電話が突然、鳴りだした。とある大書店の仕入れ担当者からだった。相手は大慌ての様子で、いきなりこう尋ねた。

—おたくの『メディア・リテラシー』は何色ですか？

—赤と黄色で…

—それぞれ、それ、いま在庫は何冊ある？ 全部いただきたい。いますぐ車で向かうから…

やれやれ、件の担当者は仕入れミスをしてかしてしまったようだ。木曜の朝、さる大手版元に出した大量注文は、確かに書名は間違っていなかったものの、前夜にTBSが紹介したものとは違っていた。というのは、お客が異口同音に、「色が違う」と言ったのだ。

これそのものが、ひとつのメディア・リテラシーだった—。テレビというのはものすごい影響力を持っているが、あまり長持ちしない、というのがひとつ。そしてもうひとつは、視聴者がテレビから最も強く受けるインパクトは色であるということだった。

あの「運命的な出会い」から15年、立命館大学やFCTなどでの鈴木みどりさんらのご活躍のおかげで、メディア・リテラシーは日本でもすっかり市民権を得た。みどりさん亡きあと、さらなる発展を担う若い世代の研究者、アクティビストの広がり期待を寄せたい。

FCT と GCN

東京学芸大学 村松泰子

鈴木みどりさんと、最初に会ったのは1978年10月。ともに30代だった。FCT（当時の日本語名称は「子どものテレビの会」）が発足して1年後の第4回セミナー「子どものテレビに多様性をもとめて！」に、私が報告者として参加したのだった。その日の私の記録には、「11時半より午後9時まで！ 即FCTの会員にならされ、来年のプロジェクトへの参加を半ば強制的に決められた」とあ

る。セミナー参加者をすぐ巻き込み、話し合い、ぐいぐいと引っ張っていく彼女の行動パターンは、時間をかけてつくられたというより、すでにこの頃にはできあがっていた。

以来、30年近いFCTの歴史を通じて、私は本格的な活動の担い手にはなれないまま、周辺から発言したり、活動の成果を利用させていただいたりしながら、鈴木さんとつかず離れず交流を続けてきた。

また、80年代後半からだろうか、FCT自体の活動とは別に、「メディアとジェンダー」領域の活動をいっしょにしてきた。89年にNHKと民放連に提出した「放送に男女平等を実現するための要請書」は、鈴木さんを含む数人の女性たちが中心になってまとめた。東京・青山の子どもと女性の本の専門店クレヨンハウスのカフェテラスで文面を練ったことなど思い出す。この頃から、このメンバーを核に勉強会をもったり、90年代に入ってから、ユネスコのメディア・コンサルタントのマーガレット・ギャラハーの依頼を受け、「女性とメディア研究日本委員会」という名称で、全国の放送局・新聞社に働く女性の実態調査を行ったりもした。

そして、1995年の第4回世界女性会議（北京会議）での報告を機に、グループ名をGCN（ジェンダーとコミュニケーション・ネットワーク）とした。この命名も彼女が音頭をとったように記憶している。「日本のメディアの中のジェンダーとセクシュアリティ」についてのワークショップで、鈴木さんは「日本のメディアと政府へ向けた提言」への賛同者を募り、ワークショップをまとめた。この提言は、のちに鈴木みどり編『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』に、加藤春恵子さんの担当章の一部として採録されている。私はテレビCMについて報告をしたが、そのための英文原稿を北京までの機中で鈴木さんにチェックしてもらったのだった。このとき取り上げたCMについて、その後、同書用にさらに深く読み解いた際に、編者の意にかなったと言われたこともなつかしい。1997年に刊行された同書は、その後、2004年に7刷を重ねるまでに至っている。

数年前、このGCNのコアメンバーで本をまとめようかと何度か集まったものの、全員多忙すぎて実現しなかったのは、今も残念な限りである。

決して密ではなかったが、質的には深かった彼女との交流から得たものは、私にとってはかり知れない。初期にはメディア教育と言っていたメディア・リテラシー概念をいち早く紹介されたのはもちろんだが、それを含めた彼女の活動の核にあった「市民」にかける思いにいつも刺激を受けた。彼女の師であるウィルバー・シュラムの功績を改めて認識し、私が国際コミュニケーション分野の文献だからとあまり目を通していなかったマクブライト委員会報告書『多くの声、一つの世界』の意義や、そこで紹介されている「コミュニケーションする権利」の重要性に目を開かれたのも、鈴木さんによってである。

昨年の3月に私の学生の今後の指導を依頼したとき、珍しく長文の返信メールが届き、メディア・リテラシー研究所を設立予定であるので、「活動を支えてほしい」とあった。亡くなられる直前にいただいたご連絡で、「鈴木みどりメディア・リテラシー研究基金」の選考委員に、GCNのかつてのコアメンバーだった3人を入れるようにというのが彼女の希望と聞いて胸が詰まった。

一緒に活動した人ならよく知っている鈴木さんの性格ゆえ、FCTの活動に一時はかなりコミット

しながら、離れていった人もいないわけではない。その意味では、少し離れたところからながら、30年近くともに歩んで来られたことに、感謝している。そして、今、混迷する社会のなかで、彼女の遺志を少しでも実現する方向に、私自身がコミットしていければと思っている。

鈴木みどり先生の思い出

立命館大学産業社会学部教授 仲間裕子

鈴木みどり先生とは同じ年度に学部に着任し、研究室もお隣でしたのでよく行き来し、同僚以上に親しい関係をこの11年間保っていただきました。京都の街中で夕食も何回かご一緒しましたし、葉山のご自宅にもお邪魔したこともあります。この一、二年はなかなかゆっくりお話をする機会がなかったのですが、それでも入院される直前に久しぶりに食事を共にしましょうと約束をしていました。まもなく退院され、またお会いできることを疑わなかった私にとって、先生がいらっしやらないことは今でも信じられないぐらいです。

背筋をいつも伸ばされ、姿勢よく、キャンパスを闊歩される先生のお姿は、専門分野の頂点に立たれる第一人者の輝きがありました。メディア・リテラシー研究会に参加させていただいた時も、先生のご発言に出席者が耳を傾ける、緊張した雰囲気を感じたのは私だけではなかったと思います。メディアと表現の相互関係を重視され、つねに‘クリティカル’な思考回路から、表現における性差の問題、表現の自由の論点など、美術史を専門とする私にも大きな学術的刺激となりました。

国連のユネスコ関係の仕事など国際的な舞台に立たれる機会が多く、理論と実践の両面において活動をされてきました。またスタンフォード大学での留学時代も含めて、研究を通して知り合いになられた研究者やNPOの活動家とのネットワークは驚くほど幅広く、しかも欧米にとどまらず、アジアへもたえず気を配られるなど、国際的なバランス感覚をお持ちでした。またその際‘decent Japanese’であるだけでなく、主張する日本人でいらっしやることに感銘を受けておりました。

先生は教学においてとくに院生の指導に力を注がれ、『メディア・リテラシーを学ぶ』や『放送レポート』誌に至るまで共同研究を多く残されました。『産社論集』にも特集として研究を掲載されたのもつい去年のことです。院ゼミには大学の外部からも参加があり、研究室は活気に満ち、つねに明るい声が反響していました。その多くが社会経験豊かな女性たちであったことは印象的でした。私と同様に“鈴木みどり”流の生き方に賛同し、先生に元気づけられる人々であったと思います。

ドイツでの研究調査の為、お葬式には列席できませんでしたが、クリスチャンでいらした先生を想い、エルベ川沿いのドレスデンの教会のミサに参加しました。パイプ・オルガンが響くなか、社会や学問に対する厳しい視線のなかにもつねに‘世界’に優しいまなざしを向けられた先生に感謝

の気持ちを込めたつもりです。先生のご意志を少しでも継いでいくことができればと思っております。

風のように台風のように

立命館大学産業社会学部教授 増田幸子

何をどこから書いてよいのやら……この原稿を依頼されて本当に困りました。鈴木みどり先生の思い出を思いつくまま書いていったら限りなく長くなりそうですし、様々な思い出もまた、生前、鈴木先生と深い親交があった方々が先生の人柄や生き方をそれぞれに語ってくださるでしょう。私がここで語れることは何かと考えあぐねたら、前夜式の後のことに思い当たりました。

その日、鈴木先生の訃報を聞き駆けつけた、かつてのゼミ生や院生たちが前夜式に参列していました。キリスト教の前夜式にはいわゆる通夜のようなものはありません。前夜式終了後、みんなそのまま解散するには淋しく、近くで食事をしようということになりました。池袋が仕事のテリトリーだというゼミ生に案内されて、アジア料理のレストランに腰を据えたら、前夜式に間に合わなかった元学生たちが携帯で連絡し合ってから集まってきました。大手新聞社でばりばり働いている人、メディア関連の職業ではないけれどしっかり社会人らしくなっている人、結婚し子どももいる人……どの人もそれぞれの人生を歩いているように見え、鈴木先生の「遺産」を見たように思いました。

そして、私自身何より驚いたのは、一人を除きすべてそこに居合わせた鈴木先生の学生さんたちを知っているということでした。ここ数年、市民活動の中心から離れ、鈴木先生と親しくお話する機会も減っていましたが、鈴木先生とは「メディア・リテラシー」をめぐるこんなにもおつきあいがあったのだということは今更ながら気がついたのです。

思い起こせば、私をはじめ鈴木先生にお目にかかったのは立命館に（現在の産社ではなく）語学の教員として赴任する前（おそらく11年前）です。鈴木先生が講師をされていた市民講座に参加したときではなかったかと思います。メディア・リテラシーに関心を持ち始めていた私は、その後先生が立ち上げたメディア・リテラシー研究会やゼミ生たちの発表会などを聞かせてもらうため、その頃住んでいた大阪から何度か立命館大学へ足を運びました。そして、鈴木先生が代表となっているFCT（NPO法人市民のメディア・フォーラム、現在のメディア・リテラシー研究所）の活動にも次第にコミットしていきました。人の縁とは妙なもので、立命館の外国語講師の仕事が決まった時、そのことを先生に告げたら「あら、そうなの？」と笑ってらっしゃいました。

その後、先生が講師をされる市民講座についていたり、ワークショップのお手伝いをしたり、「スタディ・ガイド」の作成にも参加させてもらいました。南から沖縄、佐賀、広島、岡山、長野、そして海外のカナダまで、メディア・リテラシーの活動とこのような場所は、鈴木先生とその場にいた人たちというショットで、映画のフラッシュバックのように私の頭の中に蘇ります。たとえ

ば、那覇のホテルのロビーで同行したゼミ生にいつもの「みどり節」で指導する先生とシュンと肩を落とした学生の姿、トロントで行われたメディアサミット会場で、旧知のイギリス人研究者マスターマンと「Len!」「Midori!」と呼び合いながらハグする姿。「はいはい、これあげる」と言って自分のビールを周りのジョッキーに注ぐ姿、など。鈴木先生は根っからのリーダー（ボスという方が適当？）であり、人とのコミュニケーションを楽しみ、人の中にいるのが好きな方だったのではないかと思います。覚醒した市民、新し物好き、おちゃめ、よりよいものを求めての飽くなき挑戦、後に続く若い人たちへの期待、社会への「クリティカル」な視点と奉仕精神、どれもこれも鈴木先生に当てはまる言葉ではないでしょうか。「先生はいつ眠るんだろう?」「たぶん、体の一部に充電できるところがあるのでは?」などという学生の冗談を耳にしたことがあります。それほど鈴木先生と関わった人たちは、そのパワーに圧倒されていたと言っていると思います。

告別式の後、FCTや院生のみなさんとテーブルを囲んだ時のこと。「本当に風のように逝ってしまいましたねえ」と私が言うと、「風ではなくて、台風よ。周りを思い切り巻き込んでね…」とあるFCTの会員の言葉。そう、あのエネルギーと影響力はまさに台風級。こんな冗談じみた会話が天国から笑って許してくださるでしょう。

情報メディア学系の観点から

立命館大学産業社会学部教授 柳澤伸司

「メディア・リテラシー」を冠した科目ができたのは1994年、それまで日本のマスコミ関係の講座にはありませんでした。そのとき産業社会学部は学部94改革で「情報・メディアコース」を開設し、そのコースの中心となる科目のひとつとして置かれたのが「メディア・リテラシー論」でした。

この新しい科目を設置したのは、メディア・リテラシーを中心にして、その視点からコースを位置づけていきたいという思いがあったからです。そしてこの科目は「情報の受け手側の視点や立場を重視して情報やメディアに対する接し方を学ぶ」ことを主軸にするもので、その担当者は鈴木みどり先生以外には考えられませんでした。

鈴木先生はそれまで、1977年にFCT（「子供のテレビの会」: Forum for Children's Television, その後「市民のテレビの会」: Forum for Citizens' Television）を立ち上げて市民とともにメディアを研究する活動を展開しておられました。その成果は『テレビ・誰のためのメディアか』（学芸書林, 1992）などの著作にみられます。そして本学に赴任されると、やがてFCTを特定非営利活動法人「FCT市民のメディア・フォーラム」としてさらに充実した形に発展させ、先生の活動は大学、市民社会、国外と精力的に拡大していきました。

今ではメディア・リテラシーという言葉は多くの人々の耳にすることとなりましたが、振り返ればメディア・リテラシーということばについても、1992年にリベルタ出版から鈴木先生が監訳者と

して出版された『メディア・リテラシー マスメディアを読み解く／カナダ・オンタリオ州教育省編』が最初で、これ以前に日本でメディア・リテラシーを冠した図書はなく（国立国会図書館の蔵書検索で「メディア・リテラシー」を検索すると、この図書が最初です）、その意味でもこの言葉を日本中に根付かせ広めた功績は鈴木先生を抜きにして語ることはできないでしょう。1994年に日本で最初にメディア・リテラシーを冠した科目を開設したのは本学部と和光大学（人文学部）だけで、それから10年たった2004年には本学を含めて20の大学で開講されるに至っています。

本学部に着任されてから「メディア社会を生きる人間の主体性の確立をめざす」メディア・リテラシー論の授業は毎年数百人の受講生を抱える人気科目となり、鈴木先生を求めて海外からも留学生がやってきました。当初、受講者の多さに先生は「こんなに大人数では授業ができません」などとおっしゃいつつも、ゼミ生や院生の協力を得ながらグループワークを取り入れるなどして独特の工夫をなされた授業をしていらっしゃいました。

鈴木先生のあまりにも早いご逝去に、たいへん残念でありませんが、この学部で先生とご一緒する機会をもてたことはとてもうれしく思っています。

鈴木みどり先生の追悼号を編集するにあたり、生前、先生と親交をもたれた方々から原稿をお寄せいただきました。「五十音順」で掲載させていただきました。また産業社会学会ニューズレター『さんしゃ Zapping』（2006年11月号）に掲載された産業社会学部の同僚の先生方の追悼文を、執筆者の了承を得て、転載しました。 （編集委員会）